

昔話を楽しもう

使用教材：「まのいいりょうし」（二年下）

横浜市立並木中央小学校教諭
ますもと ゆうこ
舛元夕子

1 はじめに

岩手県遠野市で、そこに古くから伝わる話を、語り部かたべの方から聞いたことがある。話の内容を理解しようと、語られる言葉を集中して聞いたことを覚えている。独特の言い回しや方言など、意味が分からない言葉もあったが、響きそのものがおもしろかった。

学習指導要領（二・二年）の「伝統的な言語文化に関する事項」には、児童が伝統的な言語文化としての古典に出会い、親しんでいく始まりとして、昔話などの読み聞かせを聞くことが示されている。児童はこれまで、絵本やテレビなどを通して、さまざまな昔話と出会っているが、最近では、「一寸法師」などの有名な昔話を知らない子もいる。児童に、いろいろな昔話を知ってほしい、また、私自身が遠野市で体験した「聞いたことを手ごかりに想像を広げる」という、昔話のもう一つの楽しみ方を味わってほしいと考えた。そこで、まず、



教科書にある挿絵を拡大コピーし、黒板に貼って児童に示した。

楽しい話を作っていた。「むかしむかし」から始める、「めでたし、めでたし」で終えるなど、これまで出会ってきた語りの特徴を、無意識のうちに使っていた。さらに、「本当はどんな話なのか」「早く聞きたい」と、教師の読み聞かせをとっても楽しみにしている様子が見られた。

■読み聞かせ——音声言語の特徴を生かす
教師が語る言葉から、物語の世界を豊かに想像できるように、次のようなことを意識して読み聞かせをした。

- 1) 独特の言い回しやイントネーションで昔話の世界に引き込む。
- 2) 本教材は、方言の語り口がおもしろい。「見せつべ」「なじよして」など、音声独特の表現に気づかせるようにした。語りの参

語り（音声言語）の特徴について考え、これらを生かした実践を試みた。

【音声言語の特徴】

- 1) 即時消滅性がある。
- 2) 相手が目の前にいるので、直接的なコミュニケーションを図ることができる。
↓非言語コミュニケーション（身振り・表情）の活用。
- 3) 難語・同音異義語をなるべく使わないようにする必要がある。

2 指導計画（全二時間）

第一時

- 1) 教科書P30・31の四枚の挿絵から、話を想像する。
- 2) 「まのいいりょうし」の読み聞かせを聞く。
- 3) おもしろかったところを出し合う。

第二時

- 1) 図書室で、昔話の絵本を探して読む。

考として、学習指導書付録CDを活用した。

- 2) 児童の反応を確かめながら語る。
聞き手と直接的なコミュニケーションが図れるという音声言語の特徴を生かし、児童の反応を確かめながら語るようにした。
- 3) 児童の知りたいことに合わせて、強調しながら語る。

読み聞かせを聞く前に、想像を広げて作った話から、児童が本教材のどの点に注目しているのか、どのようなことを知りたいか、それをもとに、強弱、抑揚、間の取り方を工夫して読み聞かせをすることで、作った話と関連する部分、本教材のあらすじを捉えるのに重要な部分について、意識させるようにした。

- 4) 挿絵の有効活用によって、音声言語の即時消滅性を補完する。

黒板に貼った挿絵の前に立って読み聞かせをすることで、今、語られている場面がどこなのか、児童が理解できるようにした。「山芋」「あけび」など、分かりづらいつ思われる言葉は、絵を指しながら読むようにし、話の内容がつかめるよう配慮した。

- 5) リズムや響きのおもしろさに気づかせるために、結句を大切にしている。

一般的に、昔話の最後には、「めでたし、

3 指導の実際（第一時）

■導入——「聞くこと」と関連させる

低学年の「聞くこと」の指導では、知りたいことを明確にして、主体的に聞く力をも身につけることが重要となる。児童の聞く目的や意欲を育み、聞く視点を明確にするため、読み聞かせを聞く前に、挿絵から話を想像するという学習活動を位置づけた。

【児童が挿絵から想像した話】

むかしむかし、男の人がいました。男の人は、鉄砲で鳥を撃ち、洋服を作りました。横を見たら、いのししがいてびっくりしました。おしまい。

むかしむかし、あるところに泥棒がいました。泥棒は、たくさん鉄砲を撃って、鳥をつかまえました。そして、今度は死んだいのししを見つけました。いのししを焼いて食べました。めでたし、めでたし。

このように、児童は挿絵から想像を広げ、

めでたし。』とつぴんぱらりのふう。」などの結句が入っている。本教材の結句「これで、いちご、さけた。」は、児童には耳慣れず、興味をもつと思われた。最後にゆっくり、そつと読むと、児童は初めて聞く言葉に不思議そうな顔をしていた。その後、この結句を何度もまねて言う姿が見られ、リズムや響きのおもしろさを感じていた。

4 おわりに

いつも読み聞かせをしている絵本と違って、本教材は、挿絵だけを手ごかりにして内容を理解するのは難しい。話の内容をつかむために、児童は、教師が語る言葉をしつかり聞く必要があった。読み聞かせのとき、表情から、児童が、挿絵や教師を見ながら、集中して聞いていることが分かった。「百一つあんは、鉄砲を一発しか撃っていないのに、いろんなものを手に入れたのかあ」「いのししを焼いたと思っていたけど、山芋だったんだね」などという感想の言葉には、聞く目的をもった主体的な聞き手としての姿が表れていた。音声言語の特徴を生かした指導は、低学年から行うことが大切である。読み聞かせの教材こそ、その特徴を生かすことができるのである。